



柴田鍊三郎

眠狂四郎

殺法帖

後編

眠狂四郎殺法帖（後編）

昭和三十九年五月二十五日 印刷  
昭和三十九年五月三十日 発行

定価 三三〇円

著者 柴田 錬三郎

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一  
電話東京(20)三三番(大代)  
振替東京八〇八番

乱丁・落丁のものはお  
取替えいたします。

目次

第二十六話	談亭活躍	一七
第二十七話	弱い狂四郎	一七
第二十八話	修羅場	一七
第二十九話	因果首	一七
第三十話	海辺の決闘	一七
第三十一話	酔眼記	一七
第三十二話	闇	一七

第三十三話	黒髮恋い……………	七
第三十四話	太刀洗水……………	七
第三十五話	北辰一刀流……………	七
第三十六話	待伏せ賭博……………	一〇
第三十七話	夜這い祭……………	二七
第三十八話	貞婦の宿……………	二七
第三十九話	雪女郎……………	二七
第四十話	梓巫女……………	一四
第四十一話	おのが道……………	一七

第四十二話	富田流小太刀	一七〇
第四十三話	白虎狩り	一七七
第四十四話	奇習の村	一八七
第四十五話	青竜の術	一九七
第四十六話	狂四郎叫ぶ	二〇七
第四十七話	忍者「影」	二一七
第四十八話	孤島の砂金	二二七
第四十九話	生命の座	二三七
第五十話	無常の丘	二四七

裝  
幀  
中  
尾  
進

眠狂四郎殺法帖

後編





第二十六話 談亭活躍

「談亭。市井には、金持の商人たちは、必ず、困いものを置いているとききおよびますが、それらの妾たちの、おもしろおかしいくらしぶりなど、教えてたもらぬか？」  
唐突に、その所望をしたのは、館山二万石・稲葉播磨守の夫人であった。

稲葉邸から使者が来て、奥向の女中たちに、烈女節婦の逸話を語ってくれるように、と望まれた立川談亭は、今日、まかり出るや、およそ一刻ばかり、夫人を中心に、居並んだ三十人ばかりの女中たちを、しんとさせたり、笑いころげさせたりして、さていずれ近いうちにまた一席、と頭を下げた——その時であった。

稲葉播磨守は、外様譜代旗本の中でも、最も粹人であり通客であった。かねてから、談亭は、播磨守から鼻根にされ、遊里の座敷に呼ばれて、たびたび、しゃれのめした講釈ぶりを披露していたのである。

しかし、夫人に呼ばれたのは、はじめてであったし、伺候して、挨拶したとたん、  
——これは？

と、訝ったものであった。  
洒脱な風流人である播磨守には、およそ似合わぬ夫人であった。色気なんぞ、薬にしたくも持合わせぬ、浅黒くかわいた肌の瘦せこけた、細い吊り目で尖り鼻の、ひどい反っ歯も下品な狐面だったのである。

——どういう料簡で、呼んだのか？  
この疑念は、喋りたてているあいだに、ふかまった。女中たちが、笑い崩れて、もう腹の皮が痛くなるばかりのさなかにも、夫人は、にこりともしななだったのである。そして——。

不意に、冷たい無表情で、この質問をかけて来たのであった。

「左様でございます。下世話に、貧乏人は娘三人生んだら一生安楽、と申しましてな。尤も、器量佳しであることは申すまでもなく、三日月眉に、瓜実顔、色が白うて、柳腰、すらりと立った姿に、えも云われぬ色気つてえしろものがありませぬとな。……そもそも、妾の淵源をたずねると、昔、越師確なる道人が、羅浮山に遊んで、うたた寝しているうちに、梅の精である少女が夢の中に現れたが、その美しさは、文字通り早梅の苔であったので、道人、夢中で、ひっそらえ、梅よ咲けかし、驚啼かそ、ホーホケ今日は、なんて運がいいんであ

ろ、とばかり……、へへ、どうも、浮世と申すものはこうしたもので、炒豆と女に手を出さぬ男はいない、とか、竹に雀は品よくとまる、止めて止まらぬ色の道、とか——趙師確め、とうとう、梅の精を、手活けの花にしてしまつたげにございます」

まことしやかに云つてから、

「さて——その囲いかたに相成りますが、それには、上中下に分れましてな。上位の妾宅とも相成れば、根岸か向島あたり、黒板塀を高くめぐらし、見越しの松の枝ぶりは、旦那にすてられた時に、縊る用意かとみえ、柴の門を深くとざして、一年中ひらくこともないのは、旦那のほかは、雄犬いつびき入れまいぞ、との要心とみます。玄関口には、簾が半は捲かれ、茶の間に入れば、まず目に入るのが、壁にかけられた一雙の三味線、箱火鉢には鉄瓶の湯が沸り、帆立貝の鍋は五徳の上、猫板の上には、貰入れの匣にならんで、おっそろしく長い煙管——こいつは、吉原の格子女郎めらが、ひやかし客をひき込む手段に、格子越しに、吸いつけて、さし出すのに、短いのは不便なので、だんだん長くしたと申しますな。一番長いのは一間もあって、馴染客がそ知らん顔で、行き過ぎようとすれば、えいやつ、とばかり、雁首を、帯へひっかけて、ずるずると引きもどし、知らぬ

神より馴染の鬼、わちぎや、食われとうて、こうして待っていたわいな」

談亭の珍妙なしくさに、女中たちは、どっと笑い崩れたが、夫人だけは、腕みつけるように、目を据えているだけであつた。

「……さて、二階の座敷へ上れば、扁額に曰く、春如海、床の間の山水の下に、古奇を極めた鉄色の花瓶、碧が寂びて豊かな風韻を含んだ——この代物ひとつ、たつき売つても、五十両。店では爪に火をともし吝嗇で、出すことは舌も出さず。呉れることは火も呉れず、取ることなら石地蔵の胸ぐらでも取ろうという親爺も、妾に對しては、氣前がいいのが相場でありましてな。鼻声ひとつ鳴らせば、着物でも揃でも、打出の小槌のように、願うて叶わぬことはない、というあんばいになつて居りまするて」

夫人の眉じりが、急に、びりりつと痙攣した。

それを視て、談亭は、

——さては？

と、ひとつの直感を脳裡に掠めさせつつ、

「座敷の次の間が、鬨と相成り——云うなれば、申すなれば、此処こそ、腕によりをかけて、且つくを、海鼠のように骨無しにし、猫のようにじゃれさせ、犬のごとく

へいつくばらせる女の戦さ場でありますれば、枕屏風には歌麿の十二箇月を貼るやら、博山には蘭麝を焚くやら、且つくを牀に臥かせておいて、わざと小半刻も入って行かぬのも——へへ、これを、手苦肉の計と申しまするな。さんざ、じらせて、入って来た姿が、燃えたつ緋縮緬の長襦袢に、寝化粧の匂いを、ふんとただよわせていると来ては、野郎、目尻が下って、鼻の下が延び、牛のようによだれをたらして、小便一町糞一里、おくれちゃならぬ旅の道づれ、お前とならばどこまでも——と相成る次第にございしまする」

「よい、相わかりました。……して、その妾宅に、住む人数はどれくらいじゃ？」

「概括つかまつりまして、姫やと下女と、牝猫いっぴきと、ご本尊と——合せて四人ぐらしの模様で……」

「それが、上位の妾宅と申すのじゃな？」

「中位と相成りますると、そこいらの横町新道の、下が三間に上が二間、家賃も格安になつて居りましたな、階下には母親やら妹やら、旦那が来れば、息を殺しているけしきと相成り、下位ともなれば、これは、九尺二間の棟割りの裏店で、大工や左官の親方が、カンナ屑や泥をくつつけたまま上り込んで来て、おい早いところ、床をとれ——と、せきたてましてな、そのチョンの間のひと

汗かきを、破れ障子から、近所の餓鬼どもが、面白そうに覗いている光景と相成りまする」

そう云つて、談亭は、平伏した。

頭を擡げた時、夫人の姿は、その上座から消えていた。

談亭は、立つて、長廊下へ出て、歩き出し乍ら、

「さてはや、いやはや——早野勘平、早駕籠で、はやさしかかるお城口、殿刃傷の報せなり。お軽は在所で夢心地、勘平さんは今頃は、どこにどうしてござらうぞ。……でもはや、いやはや、さだめがたきは浮世のならい、一生添うとは男のならい、いやじゃいやじゃ女の癖——遠くて近いが男女の仲、近くて遠いが犬と猿、近くて近いが目鼻口、遠くて遠いが唐天竺——」

と、ぶつぶつ独語をもらしていた。

## 二

「——というわけでありましてな、先生」

談亭が、その日の模様を、眠狂四郎に、語ってきかせたのは、それから、五日ばかり過ぎた宵であった。

神明の、矢場や芝居小屋や寄席の騒音がひびいて来る湯屋の二階であった。

箱枕に頭をのせて、仰臥し、目蓋を閉じた狂四郎は、

談亭の話をきいているのか、いないのか、合槌ひとつ打とうとはしなかった。

談亭は、かまわず、

「そこで——立川談亭、つらつらおもんみるうちに、ハタと膝を打ち——打つには、打ったが、なにしろ、対手が、大名の奥方じゃ、下手に立廻れば、こっちが打たれる。で——まあ、とくと思案して、と家へもどつて来たものの、どうも落着かなくなつた。そこで、もう一度、膝を打って、片肌ぬぐほぞをきめて——さて、どうしたと、思ひなさる？」

「……」

「稲葉邸に、白兔ならぬ鼠がいつびき、いるのに気がつきましてな。こいつめ、いまは殊勝げに、渡り中間になつて、奉公あい勤めて居るが、四五年前までは、大名屋敷専門に荒らしていた泥的で、身のすばしこさと来たら、猿をして赤面させるくらい野郎でげしてな。播磨守様は、その前歴をちゃんとご存じの上で、召使つておいでで——そこが、こいつを、手も足も出せなくしている所以であるわけでありませう。……佐吉というこの野郎を、そつと呼んで、耳うちしてやった、とお思ひ頂きませう」

「播磨守の構えた妾宅を、つきとめさせたか」

目蓋を閉じたまま、狂四郎が、はじめて、口をきいた。

「凶星。……柳橋で去年まで左袂をとつていた菊次つてえ、滅法肌の白い、ふるいつきたいような佳い女が、ふいに姿をくらました、と思つていたら、いつの間にやら、その家にいたんですよ」

「……」

「奥方は、たぶん、菊次を、垣間見なすつたに相違ありませんや。そうでなけりや、あれほど、嫉妬の夜叉になる筈がないね。……ちらと、菊次を視たとたん、同じ女に生れ乍ら、自分とは月とすっぽん、雪と炭——おのれやおのれ、この依怙ひいきをどうしてくれよう、醜女の執念、やわか、この怨みをはらさでおくべきか——。なにしろね、先生は、奥方のご面相をご存じないからだ、ひと目ごらんすつたら、合点なさる。……播磨守様は、なんの因果で、あんな、泥水をのみすぎて腹を下している。獺みたいな女を、女房にしなすつたんだか——つくづく同情申上げましたねえ」

「播磨守は、たしか、紀州の徳川の女だ。やむを得なかつたことだ」

狂四郎は、云い、

「大名で、夫婦仲円満なのが、一組でもいたら、お目に

かかりたいものだ」

と、冷やかに、吐きすてた。

恋しあって結婚した夫婦など、大名の中に、ただの一组すらもいなかった時世であった。恋愛即不義という道徳が厳然として支配していたのである。夫婦とは君父の命によって成立したのである。

夫婦は、閨房事をはじめとする日常のくらしを愉樂するために一緒になったのではなかった。家門を維持し、且繁榮させる目的のためにむすばれたのである。

武家に於ては、奥と表が厳然と別にされ、奥向に関する一切のことは、夫人の管掌に委ねられ、主人は決して口出しをせぬ例であった。と同時に、夫人は、表に就いては、何事も、耳目を働かせることは許されなかった。したがって、武家夫婦で、生涯、同行して外出することなど、ついに一度もなかった。なんとしても同行しなければならぬ場合は、遠く離れて、左側と右側にわかれ、供も別々に連れて行ったのである。

このような義理仕立ての夫婦が、仲むつまじくなれよう道理がない。

武家の妻は、まず何よりも婦道を旨とし、良人に対する愛情の表現も、婦道よりはずれてはならなかった。

徳川幕府はじまって以来の貞婦と称われている女性

は、芸州藩七世浅野安芸守吉長の夫人である。どういふ女性かと云えば――。

『松平安芸守の御内室は、加賀宰相綱紀卿の御息女也。生得武勇の心得ある方にて、乗物打物に達し、殊に長刀鍛錬のきこえあり。召仕わるる女房まで皆々勇氣たくましく、一騎当千の者たちとも申すべし。……安芸守様、奥へ入らせられ、奥方の御膝を枕にして休ませ給うに、その御目覚めぬ内は、時刻移れど、少しも膝を動かし給う事なくありしと也』

当然、安芸守吉長は、この窮屈きわまる奥向を避けて、吉原通いをするようになった。

やがて、三浦屋四郎右衛門抱えの太夫花紫、同孫三郎抱えの格子歌野を落籍させて、屋敷へ引きとった。

しかし、夫人は、これについて、一言も、意見せず、嫉妬など、みじんもおもてにあらわさなかった。

安芸守は、これら遊女二人、そして芝神明前の陰間二名をひきつれて、帰国することになった。江戸留守居役が、必死の諫言をしたが、安芸守は、さらにきき入れる様子もなかった。

帰国出立の際には、定例によって夫人への暇乞いがある筈であったが、安芸守は、その沙汰もなく、発足して行った。

夫人は、遊女陰間が美しい行装で、供揃いした歴々の諸士よりさんざめかして出發するさまを、物見の窓から、眉宇ひとつ動かさずに、見送った。

その夜、夫人は、居間で、夜が闌くるまで、灯火をあかあかと照らして、何やら、したためていたが、白衣の前をはだけ、下腹を出して、一文字に掻切つて、俯伏したのであった。

このさまを發見した女中たちが、仰天して、早く医師をと、うろたえさわぐのを、夫人は、屹と制して、切腹するほどの者が、何とて生くべきように切るもので、かねて覚悟の上である、かまえて騒ぐまい、はや介錯をと望んだ、という。

こういう女性こそ、大名の奥方の電鑑だったのである。

三

狂四郎は、不意に、むっくり起き上ると、物倦げに生あくびしてから、

「で——どうなる、というのだ、師匠の見当では？」

と、訊いた。

「殺されますよ、菊次が！」

談亭は、真剣な面持だった。

「播磨守の遊蕩は、もう幾年ぐらい、つづいて居る？」

「あっしが眞眞にして頂いてから、もうかれこれ十年に  
なりますよ」

「奥方としては、その長いあいだ、忍耐して来た。今更、菊次を殺して、世間をさわがせ、婦道にはずれた振舞い、と指弾されるようなことはいたすまい。復讐には、別の手段をとるのではないか」

「別の手段と申しますと？」

「おれに、わかる筈がない。……ただ、長い年月、嫉心を燃やしつづけて来た女がやってのける復讐は、時には、途方もない手段かも知れぬ」

「先生、たのみます！ あたしや、あのお殿様が、大好きなんですよ。なんとか、ひとつ、片肌ぬいで下さいましよ。ねえ！」

「ご免だな。おれには、播磨守が、女房に呪い殺されようと、どうしようと、痛くもかゆくもないことだし、にべもなく、はねつけた。」

しかし——。

狂四郎の腰を上げさせる事態が、それから三日後に起った。

同じ湯屋の二階に、血相かえた談亭が、かけあがって来て、

「先生、大変だ！ 菊次が、かどわかされちまった。……」



：佐吉が報せて来やがったんです。稲葉邸の奥向附きの庭番衆が数人、ふん込んで、菊次を、かつさらって行っちゃまったそうです。……この通り、おがみます！ たのみます！

と、平伏した。

「播磨守は、そのことを知っているのか？」

「いいえ、昨夜のことで、まだ、お屋敷では、誰も知っちゃ居りませんよ。お殿様が、ききなすったら、いったい、どういうことになるか——さあ、大変なことになっちゃまった！」

狂四郎は、しばらく、沈黙をまもっていたが、突然、

「間夫になるか」

と、咳いた。

談亭には、なんの意味やら、さっぱり判らなかつた。

#### 四

夜——三更をまわった頃。

狂四郎は、根岸にあるその妾宅の庭に、立っていた。

月があり、庭一带にむした苔が、光っていた。

また、泥棒猫のまねをしなければならなくなったことに、自嘲があつた。こういう忍び込みを、これまで、いくたびやってのけたらう。どうやら、浮世に於けるおの

れの役割が、常に、これなのかも知れぬ。

母屋の雨戸を、一枚はずして、すっと入れた身を、闇に溶かし乍ら、二階へのぼらせるまで、みしとも音たてなかつたのも、いつものことだった。

二階に、灯はなかつた。

障子を開ける時、はじめて音をたてた。

「おい、菊次——なぜ、灯を消している？ ちと、早寝すぎはしないか」

狂四郎は、わざと、そう呼びかけた。

「それとも、おれが忍んで来るような気がして、待っていたのか」

ずかずかと、寄るや、いきなり、掛具をはねて、そこに寝ている者の上へ、掩いかぶさつた。

相手は、「あっ！」と、小さいが、異様な悲鳴をもらして、抵抗しようとした。

狂四郎は、もう言葉が必要としなかつた。

抱きすくめてみて、

——成程、談亭のやつ、下痢して居る獺、とはうまい形容をした。

と、苦笑した。

女の肉の柔らかさなど、胸にも、腹にも、臀部にすらなかつたのである。